

メディア政治家メディア政治の諸類型

—メディア・パフォーマンス、メディア支配、反メディア—

有山輝雄

一 メディア政治家の諸類型

メディア政治家研究というのは大変魅力的な主題で、既に研究会は活動を進めておられるようなので、横から私が自分の勝手な問題関心からお話するのは余計な邪魔立てなのだが、それでもよいということなので、お言葉に甘えて勝手なお話をさせていただくことにする。ただしまだ十分資料にあたっていない大雑把な筋立てにすぎないことはご承知おきたい。

私もだいたい前に『衆議院議員名鑑』を利用して、新聞記者などを経て代議士になった者の動向を調べようと思ったことがあるが、コンピュータなどない時代であったのですべて手作業でやるしかなく、非効率的であったし、

また『名鑑』に記されている「新聞記者」の概念が曖昧でそれをそのまま集計しても信頼する足るデータは得られないと考え、途中でやめてしまった。しかし現在ではコンピュータを利用できるし、概念をきちんと整理するなどしていけば研究の展望は開けるだろう。

既に「ご承知のことと思うが、『帝国統計年鑑』には「衆議院議員職業別」が掲載されている。ただこの統計の職業分類は「無職業」「其他」が多すぎて有効ではない。また前歴が分からないなど余り意味のある調査ではないが、動向を大づかみに見るために掲げてみた。これによれば、一九一〇年代からメディア関係（雑誌記者及新聞著述通信、「出版業」）の代議士は明らかに増加している。これはメディアが大規模化・企業化し、いわゆるマスメディア

衆議院議員職業別(『帝國統計年鑑』から作成) * 第46回(大正13年)以降記載なし

	官吏	軍人	薬剤師及医師	雑誌記者及新聞寄託通信	弁護士	銀行員	会社員	商業	農林業	工業	鉱山業	漁業	諸教員	出版業	無職業	其他	不詳	合計
1902年	7	2	9	7	51	19	9	35	120	9	7	-	-	-	56	23	21	376
1903年	1	4	9	8	55	16	13	34	126	9	6	-	-	-	72	23	-	376
1904年	-	1	3	13	57	16	14	35	132	8	4	-	-	-	73	23	-	379
1908年	-	1	7	17	64	8	19	34	104	6	6	-	-	-	89	24	-	379
1912年	7	-	4	22	63	15	55	17	80	2	9	-	-	-	77	30	-	391
1915年	8	-	2	31	54	14	51	32	81	8	6	5	5	-	73	11	-	381
1917年	1	-	15	28	56	8	53	19	79	8	9	6	6	4	73	16	-	381
1920年	30	-	8	25	68	7	89	36	93	15	12	4	6	-	65	6	-	464
1924年	12	3	14	30	64	4	90	29	83	18	5	1	9	5	79	12	-	464

になっていく時期と重なっている。マスメディアの形成がメディア政治・メディア政治家のあり方にも大きな変化が起きたことと推測できる。しかし、それがどのような変化であったのかは、こうした数量的調査からは分からない。

そこで視点を変えて、メディア政治家にいくつかの類型を想定して、考えてみたい。メディア政治家という概念については研究会で既に一定の定義がなされているのかもしれないが、厳密な定義をもとに話すのは面倒だし、また厳密な定義はメディア政治家・メディア政治という茫漠とした概念のもつ豊穡さを削ぐことにもなりそうなので、取りあえずメディアの力を通じて政治力を発揮する政治家。あるいはメディアを利用し同時にメディアに利用されることを自己の重要な政治力の源泉としている政治家という程度の曖昧な概念ということにして話を進めたい。無論、政治力の源泉は様々あるわけで、暴力・常習的虚言・変身・転向、時に誠実さなど無限である。メディアの利用はそのなかの一つにすぎない。

私の問題関心からメディアの力を利用した政治、政治

家ということを考えると、いくつかの類型を想定できる。

第一に、政治におけるメディアの力において重要なのはやはりメディアが観客・読者・視聴者を政治に呼び込んでくることだろう。メディア政治家は、観客・読者等を前にして、パフォーマンスを演じてみせる政治家である。それは派手で衝撃的な発言や行動、先行する著名人への悪罵、弱者の味方といったポーズなど様々あるが、どんな場合でも隠れた善行・悪行ということはないのであって、あくまで観客の眼前で賑々しく演じられなければならない。彼らはそれによって観客の拍手喝采を受けたり、あるいは罵倒を浴びせられたりする。いずれにせよ観客の強い反応を引き起こし、そこに生ずる話題性・有名性を獲得するのである。それを有力な政治力の源泉として政治活動を展開する。例えば大衆の代弁者という役割を演ずるのである。

こうした類型をメディア・パフォーマンス型メディア政治家といつてよいだろう。無論、メディア・パフォーマンスと一概にいつても、演者とメディアの関係、舞台

としてのメディアの特性、演者自身の個性、また社会背景などによって様々な変種・亜種がある。例えばメディア・パフォーマンス型政治家の活動は主に社会が不定型で流動的、住民が潜在的に不安を抱えた社会のほうが受けることが多いと言えそうである。無論、これらの問題はもっと究明する必要がある。

第二に、第一タイプとは逆に表舞台で派手なメディア・パフォーマンスを演じないがメディアの力によって大きな政治影響力を発揮する政治家がいる。彼らはメディアを実質的に支配していて、それを利用して大きな政治力を発揮するのである。このタイプをメディア支配型メディア政治家と言っておこう。彼らのなかには自らメディアに登場し、自らの力を誇示する人々もいる。そうするとパフォーマンス型政治家と重なってくるのだが、メディアに自己を露出するかどうかは「趣味」の問題であって、必須のことではない。重要なのは創業者あるいは株主であることなどを通じてメディアを実質的に支配していることであって、それによって他の政治家・政治集団に隠然たる存在感・威圧感をあたえる。こうしたタイ

ブのメディア政治家、いわば沈黙のメディア政治家は日本では有力である。後で若干触れるが、現在でも依然として日本の地方社会で潜在的には大きな力をもっている。メディア政治家には、メディア・パフォーマンス型とメディア支配型以外のタイプがあり得るだろうが、当面この対照的な二つのタイプをあげておきたい。

そしてもう一つの問題として考えておきたいのは、反メディア的非メディア的政治家・政治である。メディア政治・メディア政治家を研究する際に、その研究の外部にあるものとして反メディア・非メディア政治は常に意識しておかねばならないはずである。これはメディアに登場しない政治、あるいはメディアから隠された政治、メディアに登場することを嫌う政治家である。いわば舞台裏の政治、密室の政治である。

メディアはそうした政治・政治家を外部からのぞき見ようとすることになり、内部に入り込み、内部の一員になる派閥政治記者などが生まれてくる。内部の一員になった記者が知ったことをどれだけ報道できるかはともかく、何となく怪しげな裏側情報は観客の好奇心は膨張さ

せ、「裏面を暴く」といった報道が商品価値をもつ。それに対応して密室は二重三重に奥深くなるなどメディア機能を考えるうえで面白い問題もあるが、今回は取りあげない。

ともかくメディア・パフォーマンスなどに無縁なところで、権力者たちが密室のなかで権謀術数、便宜供与、威嚇など様々な手段を駆使して進めるタイプの政治があり、政治家がいる。それを取りあえず現実権力政治と呼んでおこう。こうした現実権力政治はメディア政治の反世界、もしくは権力政治家からすればメディア政治は自らの反世界、唾棄すべき低俗政治ということになるだろう。しかし、実際には大規模化したメディアが政治社会への浸透力を高めていくのが大勢であるから、反メディア政治は前述の密室の二重三重化とあいまって複雑だが、これも今回は論じられない。

二 反メディア政治家

メディア政治・メディア政治家をこの三つタイプ（パ

フォーマンズ型メディア政治家、メディア支配型政治家、反メディア型政治家」に分けて考えてみると問題を深めていけそうである。そして、これら三つのタイプに歴史性（歴史的段階）と中央対地方という二つの軸を設定してみると、より具体的なかたちでメディア政治・メディア政治家を明らかにできるように思う。

色々前提となる枠組みについて述べてきたが、その中身に入るのはなかなか難しい。また正直に言えば、今日はそのまでの準備もない。そこで取りあえず、それぞれのタイプの代表的な人物を事例にあげて、イメージを少し膨らませてみたい。それは次の本格的な研究のステップになり得るだろう。

最初に取りあげるのは、反メディア政治家としての原敬である。ただ、原敬を取りあげる前に、反メディアというこの関連で、少し余計なことだが、メディアの相対化ということに触れておく。メディア史研究者、マス・コミュニケーション研究者はメディアに注目する余り、メディアを過大評価しがちなのである。メディアの役割、影響力、社会的評価をそれぞれの時代において大きく見

積もって、それを前提にして研究してしまう。無論、メディアの影響力などを直接の研究対象とする際には、影響力の測定に慎重であるのだが、メディアそのものやそれに関連する人物の研究に専念すると、どうしても研究対象を過大評価しがちであって、しかも最近のように隙間を狙う研究が多くなってくると、そういう傾向が強まっているように思える。

研究対象だけ見ていると、メディアの役割などまったく無視して進行する政治、権力政治が持っていた意味を理解できない。時にそうした権力政治を否定的に見て、片付けてしまう。逆に当時においてはまったく無視されていたも同然のメディア活動を拡大鏡を使って覗きこんで、そのメディア活動やそれに依拠した政治家・政論家を過大に考えることになる。それはそれで意味のあることではあるが、それだけになってしまうと、全体状況の中でメディアの役割、位置を見損なってしまう。メディア政治が反メディア政治の強力な磁場のなかで成立していることが見えてこないことになってしまっているのである。

事例とする原敬（1858-1921）は明治大正期の重要な政

治家であり、余りにも著名である。膨大な研究・伝記が存在している。ここで触れたいのは原敬の反メディア政治家としての面である。その際に注意しなければならないのは、彼は屈折に満ちた青年期に、『郵便報知新聞』や政府系新聞『大東日報』の記者であつたことである。一定のメディア経験を経て外務官僚・政治家になつたのである。

原敬は周知の通り南部藩の家老の家に生まれたが、戊辰戦争の敗者として非常に屈折した少年期青年期を生きた。薩摩などから「白河以北一山百文」と馬鹿にされたのを心に刻み、後に「一山」を号としたことはよく知られている。さんざん苦学したあげく、ようやく司法省法学校に入学したが、ささいな紛争から退学させられた。そのとき一緒に退学となつた友人が陸実(羯牟)である。彼らは世に出るため新聞記者になろうとしたが、原敬は成功し、陸実は失敗し故郷弘前に帰つた。その後、彼らの行路は交差してそれぞれ逆の方向にそれ、遠く離れていくが、ほぼ同じところから出発したのである。

しかし、原敬は新聞記者に見切りをつけ、外務省に入

り、官僚・職業的政治家となつてからは、新聞論調・報道を尊重して政治を進める考えはほとんど持たなかつた。新聞社説を再び書くこともなかつた。ただ、彼の残した膨大な『日記』は彼なりのジャーナリズム(日々の記録)であつたと言えなくもない。

だが、彼は新聞の機能をまったく無視していたのではない。新聞記者を政界情報屋として利用していたし、一時は大阪毎日新聞社の社長を務め、新聞社経営の合理化に努めている。しかし、彼はメディアの力について決して過大評価せず、派手に展開される新聞言論報道にもきわめて冷静に、あるいは冷ややかに見ていた。三谷太郎氏は、原敬が現実政治を動かす力は大衆ではなく、官僚にあることを見抜き、大衆が力をもっていない状況では「象徴は政治を動かす力をもちえない」と、「政治的価値に接近するルートとしてジャーナリストを経由するルートを放棄」したとしている。

原敬は青年期の新聞記者経験を経て、藩閥政治家・官僚、政党政治家などとの権力政治を生きる選択したのである。彼は内務大臣時代新聞記事を度々取り締まつたが、

それは新聞記事の政治的影響力・社会的影響力の大きさを懼れていたからではなく、攪乱要因あるいは雑音として取締り、また取締まっても大問題とはならないと見なしていたからである。

彼は新聞言論や報道が「国民」を代弁しているのではないことや一時の人氣を得るための見かけの強硬論が「輿論」となり、操作しているつもりがいつのまにか自分もそれに巻き込まれ抵抗できなくなってしまう政治のメカニズムを十分承知していた。諸新聞が勇ましい対ロシア開戦論を唱えている一九〇四（明治三七）年二月五日、彼の日記には「昨日来時局切迫露国は戦争に決せし由、風聞頻々たり、号外を發する新聞紙多し、時局の成行に關して政府秘密政略過度の弊、國民は真相を知らず、又政府も最初は満州問題に關し露国に請求せし由なるも漸次變遷して今は朝鮮に於て中立帶の広狭を爭ふ位に過ぎざるものゝ如し、斯くても開戦とならば國民は無論一致すへきも、今日の場合にては國民の多数は内心に平和を望むも、之を口外する者なく、元老と雖も然るか如くなれば、少数の論者を除くの外は内心戦争を好まずして

而して實際には戦争日々近寄るものゝ如し」と記していた。²⁰政治家・新聞記者がホンネを隠して表面上無責任な強硬論を唱えているうちに、主張がどんどんエスカレートして引き下がれなくなり實際に戦争を引き起こしてしまっているというのである。

反メディア的政治家として原敬は明治末期から大正中期にかけて桂太郎など藩閥政治家・官僚と複雑な駆け引きを駆使して権力の中核にまで登りつめていった。原敬の政治手法は少なくとも彼が暗殺される時点（一九二二年）まで現実的であり有効であったと言えるだろう。一九二〇（大正九）年二月、院内外での普選運動高揚のなかで衆議院を解散し、五月の第一四回総選挙において政友会は圧勝した。院外の運動・諸新聞は原敬の強引で抑圧的な権力政治を激しく批判したが、彼にとつて十分折り込みずみの事態でしかなかった。

しかし、長期的に見れば、現実政治家原敬は非現実的であつた。大衆が登場するという新しい政治社会動向を先取りすることできなかったのである。周知のように一九二五年に普選法案は国会を通過し、民衆が政治に登場

する。政友会は彼の死もあつて新しい政治状況、政治文化に適應することができなくなり、以後の政治において混乱していった。

三 パフォーマンstype政治家

この原敬の暗殺前後がメディア政治の一つの画期である。これ以降、メディアでのパフォーマンスを一つの政治力の源泉とするタイプの政治家への評価がそれなりに高まってくる。尾崎行雄は「憲政の神様」といった尊称を与えられ、政党政治家たちもメディアを無視できない風潮が生まれる。それ以前からメディア・パフォーマンスを試みる政治家はいたが、彼らは揶揄の対象であることが多く、政治家として必ずしも尊重されていたわけではない。勝手に言わせておけばよい存在であった。要するに先ほど述べたようにメディア政治家には歴史性があつて、歴史的段階によってあり方が違ってくるのである。

大雑把に言えば、一九二〇年代からメディアⅡ輿論の

代弁者という擬制が成立してきた。「輿論」は幕末以来政治的価値としてあるが、この時期様々なたちで民衆が政治の舞台に登場してくる状況のなかで象徴としての「輿論」を政治に組み入れていく必要性は高まった。しかし「輿論」は余りに漠然としており、それをいかにして政治に組み入れること自体が論争を引き起こしてしまふ。そこでは取りあえずメディアⅡ輿論の代弁者であることとするのが多くの政治集団、そして勿論メディアにとつても便利であるという状況が出現してくるのである。実際、そうした合意が漠然としているにせよ形成されてくる。それは「輿論」を実際に尊重するか否かとは別問題であつて、「輿論」をそのように取り扱うのが新しい政治文化となるのである。

ただし、そこでのメディアとは主流的有力メディアということであつて、それから外れた意見報道や運動はメディアⅡ輿論という擬制の範疇外ということになる。それを端的に示すのが普通選挙法と同時に治安維持法が成立したことである。「輿論」から排除されたものは、極端には「非国民」のレッテルが張られるのである。

当然、こうした「輿論政治」に適応したメディア政治家が登場ということになる。しかし、他方での権力政治は依然として存続しているのであるから、輿論政治と権力政治の關係はなかなか複雑である。輿論を動かすメディア・パフォーマンスは政治の舞台中央に出てくるのであるが、メディア出身の政治家が権力政治の中枢にまで入り込むのはなかなかできない。やはり権力政治中枢からは外されていた。朝日新聞社出身で派手な言動によって注目を集めていた中野正剛のような例があげることができる。

しかし、長期的にはメディア政治の相対的力は大きくなり、政治文化は変わっていった。そうした政治文化での権力政治とメディア政治の關係は今後具体的に研究する必要がある主題である。そこで注意すべきはメディア出身の政治家ではなく、近衛文麿、東条英機といった元来非メディア的出自をもつ政治家がラジオ放送などに登場して一定のパフォーマンスを行うようになってきたことである。

しかし、今日は一九二〇年代・三〇年代のことを論ずる

よりも、一九二〇年代をメディア政治の一つの画期とする見方をより明確にするために、それ以前に遡ってみた。原敬が政友会有力者にのし上がり、内務大臣、総理大臣などを務める一九〇〇年代から一九二〇年代の時期あるいはもう少し遡って一八九〇年代から一九二〇年代までの時期をメディア政治の一つの過渡期と見ることが出来る。それ以前の時期においてメディアの言論報道は派手ではあったが、原敬が見抜いていたようにその力には限界があった。しかし、一八九〇年代頃からメディア政治から見れば注目すべき現象が出現してきている。

センセーショナルなキャンペーンを売り物とする新しい類型の新聞が出現し、それが短期間にそれまでの新聞が到達できなかった大多数を発行し、量としての読者を作りだした。言うまでもなく、当時の政治制度においては選挙保有者が公認の政治主体である。だがその外縁には国家の担い手としての「国民」、具体的には納税者・兵士としての「国民」という主体が想定されていて、それがなければ国家は成立しない。だが、その政治において「国民」はそれまで抽象的言葉としてあるだけだったが、

量的拡大をはかつてきた新聞はそれに読者というかたちである程度の実態をもたせるようになってきたのである。そこに起きる問題は複雑だが、今日の話題と外れるので深く立ち入らないこととして、メディア政治との関係についてのみ触れる。

センセーショナルなキャンペーン・ジャーナリズムを主導したのは、無論黒岩涙香の『萬朝報』と秋山定輔の『二六新報』である^③。どちらもきわめて個性的な人物だが、なかでも秋山定輔は獲得した有名性を威光として選挙を出て、衆議院議員となる。さらに特異な策謀で明治末期から大正初期にかけての政界を攪乱させた。アメリカのW. R. ハーストなども似たところがある。秋山定輔は、このメディア過渡期の典型的なパフォーマンスタイプメディア政治家と見ることができるのである。ただ彼の後半生はそれだけでは片付かないところがあつて、それもまた興味深い。

秋山定輔はよく知られた人物だが、簡略に経歴を述べれば慶応四年七月七日（一八六八年八月二四日）生まれ、一九五〇（昭和二五）年一月一九日没^④。岡山県出身。

父親は米相場の投機商で浮き沈みの激しい生活だったようで、彼の成長期には一家は貧窮に陥っていた。大学予備門を経て東京帝国大学法学部に入学したが、人力車夫をするなど苦学したという。卒業後、一時会計検査院に就職したが、ほどなく退職し、一八九三（明治二六）年一〇月二六日（二六歳）に『二六新報』を創刊した。それまで新聞記者、新聞経営の経験はまったくない。しかし一八九五年六月資金難のため廃刊。その後の活動は不明だが、孫文、宮崎滔天などと深い親交をもったとされる。

一九〇〇（明治三三）年二月『二六新報』再刊。この時には鉱山事業者坂本金彌の援助を受け、その資金によつて大胆な新聞経営を進めた。紙面では三井攻撃、娼妓の自由廃業、岩谷松平攻撃など様々なキャンペーンを連日展開し、しかも一九〇一年四月三日第一回労働者大懇親会を開催するなど世間を震撼させる話題を連発した。その上、一九〇三年一月二六日には「大告白」と称して、それまで極秘にされていた自紙や他紙の発行部数を紙面に大々的に掲載した。新聞界にとって衝撃的な事

件であつた。この「告白」は『二六新報』の経営戦略に基づいていたから、部数の正確性は疑わしいが、ともかくそれによれば『二六新報』は一四二、三四〇部。第二位は『萬朝報』で八七、〇〇〇、『報知新聞』八三、三九五となつており、『二六新報』は再刊三年にして都下の新聞中群れを抜く発行部数を得たことになる。

彼は自ら論文・記事などを書くことは稀だとされるが、彼の個性は紙面全体に貫かれていた。同時代には『萬朝報』の黒岩周六とともに「萬朝報は黒岩周六を紙面に印刷したるもの也、二六新報は秋山定輔を紙上に印刷したるもの也」（伊藤銀月「黒岩周六と秋山定輔」）などと評されていたのである。

一九〇二年八月第七回総選挙で東京市区で当選（無所属）。一九〇三年三月第八回総選挙で再び当選。同年二月著名な奉答文事件を起こし桂太郎内閣を窮地に追い込んだ。しかし一九〇四年三月第九回総選挙で当選したものの、同年三月初山が「露探」という疑いを受け、秋山は代議士を辞任せざるをえないことになってしまった。労働者懇親会の会計処理問題、労働者懇親会中止、「露探」

風聞と秋山定輔の周辺では次々と不可解な事件が起こり、秋山定輔の声望も失墜し『二六新報』も急速に衰弱する。これら事件は桂内閣によって仕組まれた疑いが濃く、これまで権力者・権威者の醜聞をあぐどい筆で暴露してきた秋山は今度はより大きな政治の陰謀にあしもとをすくわれたのである。

以後の秋山の政治活動は劇的に転換した。それまでの藩閥攻撃から一転し山県有朋、桂太郎と裏面で密接な関係を持ち、大正初期の桂新党設立、さらに昭和に入ってから近衛新党など様々な政治的策謀の黒幕として活動した。日中戦争期には国民政府との極秘の和平工作にあたるなど一貫して裏舞台の政治家であつたのである。一九五〇年、熱海伊豆山で没した。

前半生はまさにパフォーマンスタイプメディア政治家であり、後半生は政治の表面にはほとんど登場せず、様々な政治家・政治集団間の非公式調停・斡旋の黒幕政治家である。前半と後半とはまったく相反する政治家として生きたのである。それは一八〇度の転向のように見えるが、秋山自身のなかでは通貫するところがあつたはずで

ある。

それはともかく、社会を震撼させる事件を自ら演出し自ら主役を演じ、観客・読者を作りだし、彼らの拍手喝采を得る、同時に顰蹙を買い悪名を得るという前半生での彼の政治手法は鮮やかで、時代の転換を示していた。周知の通り彼以前にも新聞を背景に政界に入った人物は相当数いる。だが、秋山が独特なのは、彼が新聞発行以前にほとんど政治活動歴をもたなかったことである。彼はまさに自分の作った『二六新報』で派手なパフォーマンスを演じてみせ、それによって獲得した有名性・自己顕示性を跳躍台にして政界に入ってしまったのである。

彼の有名性は悪名性と表裏一体であるから、『二六新報』の急膨張と没落をもたらしたが、それは一九世紀末から二〇世紀初頭の急膨張する東京という都会を舞台にしている。秋山自身も地方から立身出世を目指して上京した野心に満ちた青年であったが、当時の東京は出世の欲望とそれに敗れた失意が混濁し鬱勃とした都会であり、それがスキャンダル暴露のメディアのエネルギーであったのである。そこに前述したメディア政治家の歴史性とい

う軸とともに中央対地方という軸が存在しているのである。

四 メディア支配型政治家

秋山定輔のようなメディア・パフォーマンス型メディア政治家の対照的なのが、メディア支配型である。メディア支配型政治家は地方の政界に多く、様々な事例があるが、今回は一つの典型として『新愛知』社長大島宇吉を取りあげる。『新愛知』は言うまでもなく現在の『中日新聞』の半身で、もう半身は小山松寿の『名古屋新聞』である。また『中日新聞』は現在名古屋市内、愛知県さらにはその周辺において圧倒的シェアを誇っており、東京においては『東京新聞』、石川県では『北陸中日新聞』、福井県では『日刊県民福井』を発行するなど部数では優に全国紙に匹敵している。

現在、中央と地方とではメディア状況が大きく異なっている。例えば、中央ではともかくも新聞社の競争が存在しているのと対照的に、日本のほとんどの地方では県域レベルで新聞社の独占が成立し、その新聞社が放送会

社、場合によれば複数の放送会社を系列化にしている。

これは戦時中の「新聞統合」体制に起因するが、「新聞統合」において特定家族の株式所有については部分的制約が加えられたが、基本的には認められ、それは敗戦後のGHQの占領政策においても手をつけられなかったので、大枠としては現在でも存続している。現在の大島家や小山家の株式所有状況は不明だが、両家が中日新聞社の経営に一定の発言力を持っているだろう。そして中日新聞社が中部地方の政財界で大きな影響力をもっていることは言うまでもない。

少し脇道だが、中央と地方という枠組みを立てた動機は、これまでのメディア史研究が新聞でも、放送でも、出版でも中央のメディアの研究に偏っているという反省である。せいぜい大阪における新聞社の経営拡大とか、東京の中心性成立前の明治初期の地方新聞などの研究が比較的厚いぐらいだ。これは、近年メディア史研究が深まってきているが、まだまだ質量ともに劣っていることから必然的なことであるが、地方のメディアの研究が乏しいために中央のメディアの抱えていた問題が見えて

いない。せいぜい中央新聞の地方進出といった問題関心しか立てられてこなかった。大げさに言えば、地方は中央紙・雑誌経営の眼前にある未開の荒野であるかのような。このため、それぞれの時代におけるメディアの全体的状況を見誤っているのではないだろうか。今までのメディア通史は相当偏向していて、今日私が話したのも自明のごとく、東京のメディア動向をもとにしている。言うまでもなく、これはおかしいわけで、もっとそれぞれの地方に視点をおいたメディア史研究を積み重ね、さらに中央と地方の関係あるいは地方相互の関係を十分視野においた研究が必要なのではないかと思う。メディア政治家研究はその契機になりえるはずだ。

大島宇吉の経歴を簡略に述べれば、嘉永五年（一八五二年）尾張国東春日井郡小幡村の豪農の家に生まれた。漢学・剣術・柔術等を学び、二八歳で小幡村戸長となった。当時盛りあがった自由民権運動に参加、名古屋に修練道場兼自由党系政治結社の公道協会を創立するなど活躍し、戸長を辞職し自由民権運動に専念するまでになった。一八八四年には激化事件の一つ名古屋事件が起きて

いる。⁶⁹名古屋事件は、幕末の草莽隊、博徒、急進自由民権家の流れが重なり合い、活動家達が強盗・殺人を繰り返す複雑な事件である。大島は直接関係しなかったと言われるが、逮捕の危険を感じ数ヶ月逃亡している。その後、南方進出を企図してビルマなどの調査活動にあたったといわれる。帰国後、国会開設、衆議院議員選挙に備えて政治活動・新聞活動を再開し、一八八六（明治一九）年無題号新聞、一八八七年『愛知絵入新聞』を創刊、これは一八八八（明治二一）年『新愛知』と改題し、自由党系の有力新聞となった。一八九〇年新愛知新聞社社長に就任し、以後一貫して社長を勤めた。

一八九〇（明治二三）年第一回総選挙に愛知県第三区から名古屋俱樂部（自由党）候補として立候補したが落選。以後、自ら選挙に出ることはなかったが、愛知県自由党（後には政友会）において隠然たる有力者となり、「代議士製造業者」「沈黙よく支部黨員を制す」といわれた。政治の表面に出たのは一九一九年第一三回総選挙にやむなく立候補、繰り上げ当選したのが唯一である。長らく政友会愛知県支部長を勤めるとともに、『新愛知』の

経営に尽力し同紙を愛知県最有力の新聞として成長させた。一九三三年からは『国民新聞』の経営も引き受けた。一九四二年には「新聞統合」によって『新愛知』は長年のライバルであった小山松寿の経営する民政党系の『名古屋新聞』と合併し、『中部日本新聞』（現『中日新聞』）となった。愛知県を二分してきた両新聞社が合併し、単一地方新聞社による独占が出現したのである。

大島宇吉は地方におけるメディア支配型政治家の典型である。彼は青年期の自由民権運動以来地方社会で政治的経歴を重ね、名望を得ていった。その政治活動の一環として同志と新聞を発行し、新聞を所有・経営していく、その新聞をバックに地方政治経済で大きな力を持つていったのである。しかし自らを新聞紙面等に顕示することは少なく、紙面編集は部下に任せていた。背後で所有・経営する存在である。無論、地方政界において新聞が大島の所有・経営するものであるのかは周知のことで、それが彼の隠然たる力であった。

このようなタイプのメディア政治家あるいは政治家一族は色々変異はあるが地方社会にかなり存在する。時間

をとるので詳しく取りあげないが、長野県の小坂善之助もその一人である。小坂善之助は嘉永六年（一八五三年）長野県水内郡の豪農に生まれ、青年期から戸長、県会議員を歴任。一八九〇年第一回総選挙で自由党系から出馬し当選。後には政友会の有力代議士となる。この間、信越化学、銀行業など長野県の重要企業の経営にあたった。長野県内の激しい党派争い、新聞競争のなかで一八八一（明治一四）年『信濃毎日新聞』を発刊、一八九八年社長に就任。一九二一年には息子小坂順造に譲る。小坂善之助、小坂順造は別に紙面で筆を揮ったわけではなく、背後の所有者・経営者として長野県の政財界に大きな力をもったメディア政治家であった。小坂家の隠然たる力は現在でも続いているであろう。

まとめ

余りに荒削りすぎ、また時間の順序を行きつ戻りつして話したので、かえって輪郭が分かりにくかったのではないかと危惧するが、取りあえず私の考えるメディア政

治家・メディア政治の類型論である。繰り返すのは面倒だが、メディア政治家・メディア政治を考えるうえでは、反メディア政治・政治家を対極に置いて考える必要があつて、それがないとメディア政治は見えてこない。

そしてメディア・パフォーマンスタイプ、メディア支配型という二つのタイプを提示してみた。それらは、歴史性と中央対地方という二つの軸のなかに位置づけられると思う。しかし、今日は触れられなかった問題もあつて、過渡期の前の状況、一九三〇年代から現代までのメディア政治も考えなければならない。例えばマスメディアが制度的、経営的安定した段階で、メディア・パフォーマンスを演じてみせるメディア政治家は様々にいる。現在ではこうした政治が有力なのは明らかである。そしてメディアはそうした政治の一装置となつていると言えるかもしれない。

*本稿は二〇一六年一月六日のメディア政治史研究会（於京都大学）での私の発表に若干の補訂を加えたものである。

①三谷太一郎『日本政党政治の形成―原敬の政治指導の展開』（一九六七年東京大学出版会 二三ページ）。

②岩壁義光・広瀬順昭編『影印原敬日記』第四卷（一九九八年 北泉社 三八ページ）。

③一九〇〇年代のキャンペーン・ジャーナリズムについては、別の視点からだが、拙稿「キャンペーン・ジャーナリズムと『新聞の民衆化』」『メディア史研究』第四〇号（二〇一六年一〇月）。

④秋山定輔に関してまとめた資料はないが、伝記としては桜田俱樂部編『秋山定輔伝』全三巻（一九七七年 桜田俱樂部）がある。また村松梢風『秋山定輔は語る』（一九三八年 講談社）は面白い回顧談である。

⑤大島圭吉の伝記には、野田兼一編『大島圭吉翁伝』（一九四二年 新愛知新聞社）がある。無論、中日新聞社の社史も詳しい。

⑥名古屋事件については長谷川昇『博徒と自由民権 名古屋事件始末記』（一九七七年 中央公論社。一九九五年に同名で平凡社ライブラリーで再刊）という優れた研究がある。長谷川の研究では、事件の実行者として大島圭吉の名前は出てこない。